

愛知大学教職課程の学生における教職の志望度と志望理由の関係について (2)

— 志望の程度と理由の関係に注目して、2017年度の場合 —

岡田 圭二 (愛知大学 経済学部)

梅村 清春 (愛知大学 名古屋教職課程センター室)

前原 裕樹 (愛知大学 経営学部)

吉本 篤子 (愛知大学 国際コミュニケーション学部)

要約：愛知大学教職課程生のうち名古屋校舎 (現代中国学部、経済学部、法学部、経営学部、国際コミュニケーション学部) に所属する学生であり、かつ2017年度春学期 (4月から9月) における水曜日第4時間目の「教職入門」の授業を受講している学生の教職への志望度とその理由に関する分析を行った。データは、アンケート調査にて集められた。2016年度に同様のアンケートを行っており、その結果と比較した。その結果、昨年度と同様に憧れる先生の存在や教えることが好きであることが教職を志望する大きな理由であることが分かった。また、親に強く勧められたため教職を志望したと考えている学生は少なかった。2017年と2016年違いとして憧れの先生がいることと教職を第1志望とすることの相関がさらに高くなったことが挙げられる。

1. 問題

1-1. 背景となる問題意識と本研究の目的

本研究の背景となる問題は、岡田・梅村 (2016) と同様のものが背景にある。その要点は、次の2点にまとめることができる。第1に、教職課程においてトラブルとなる事例に、親に勧められて教員を志望する学生が目

立った。そのような学生への対応が挙げられる。愛知大学において新規に教職課程に登録する学生の約200人に登録の際に教職を志望する理由や理想の教育に関する作文を書かせている (登録数については、(愛知大学教職課程の概要、2016、愛知大学教職課程研究紀要を参照)。この作文において、教職志望の理由を書く学生が多い。この作文の中には、教職への志望が様々な理由で語られている (岡田、2016)。

第2に志望の理由の趨勢が年度によって変化しているという印象の確認がある。教職課程における登録に関するガイダンスにおいて、近年、特に親に勧められての教員の志望は続かない、トラブルの元であること、運動部等の顧問になりたいがための教職は同じく続きにくい、今後、顧問や監督は外部委託され、今の大学生が中学や高校で受けた教員による運動部顧問や監督の指導とは、異なる形態になる可能性が高いことなどが説明される。そして学校の大きな目的は、各教科の学習、授業にあり、顧問や監督が目的では職業として続きにくいという話をしている。そのため、以前に比べ、親の勧めによる教職志望、運動部の監督、顧問になりたいという理由に

よる教職志望は減っている印象がある。今回、2016年度と2017年度を比較することにより、この印象が妥当なものなのかを検証する。また親の勧め、運動部の顧問、監督に限らず、2016年度の結果との比較をすることは、変わらない項目、変わった項目を明らかにし、教職志望の学生への指導に役立つ、重要な示唆を与える。

1-2. 本研究の研究仮説

調査にあたり、以下の研究仮説を設定した。まず第1にこの3年間にわたり、「親からの勧めだけを根拠にして教職を志望するのは続かない、問題があるため、よく考えなさい」という指導をしてきた。そのため、親からの勧めを理由とする教職課程の学生は少ないという仮説を設定した。第2に、「誰かに勧められてではなく、教職を志望する気持ちが強い学生は、教育自体に関する活動に志望する理由を感じている」という仮説を考えた。その他に、志望理由の作文を読むと、部活指導者になりたい、憧れの先生がいたという理由も目についた。その2点についても特に調査した。以上の研究仮説は、岡田・梅村(2016)と同様のものである。それに追加して、2016年と2017年の比較を行った。比較に関する仮説は、指導の結果、親の勧めにより教職を登録する学生は、2016年と同様に少ないというものであった。

2. 方法

以下、方法の大部分は、岡田・梅村(2016)とほぼ同じであり、その記述も2016年との比

較部部分と数値を除き、ほぼ同じである点に注意していただきたい。

2-1. 被調査者：平均年齢は18.7才であった。男性が12人、女性が12人の合計24人が被調査者として回答した。なお2016年は平均年齢18.7才、男性8人、女性7人の合計15人であった。この平均年齢は、調査した教職入門という授業が教職課程の入門段階にあたる授業のため、学部1、2年生が受講するという特性のために、低くなったと考えられる。

2-2. アンケートの構造：2016年と2017年のアンケート用紙は同じ物である。この実施したアンケートは、第1に被調査者のプロフィールに関する部分、第2に教職を志望する程度に関する部分、第3に教職を志望する理由に関する部分に大別される。プロフィール部分では、性別、年齢、社会的身分、性格について尋ねた。教職を志望する程度に関する部分では、教職を第1志望とする程度などについて尋ねた。またこの部分で、教員の仕事に関するイメージも尋ねた。教職を志望する程度の部分では憧れる先生がいるか、教えることが好きか、親に勧められたかなどについて尋ね、さらに最後に希望する校種、教科に関する部分があった。

2-3. 調査方法：調査方法は、日時を除いて、2016年と2017年の方法は同じである。アンケートは愛知大学の名古屋校舎において、4月から8月に開講される春学期の月曜日2時間目の「教職入門」を受講する学生に対して行われた。調査はアンケート用紙を配付して、回答させ、回収した。ただし、本研究と

は別に、同じアンケートを授業の終了時に行い、受講による意識の変化を検討した調査も行われた。

3. 結果

分析の方法も2016年と2017年は基本的に同じである。今回の報告でも、調査項目のうち、教職を志望する程度および志望する程度について分析した。今回の報告において、全ての調査した項目について分析している訳ではない。分析は、項目毎の集計と、教職の志望度と志望理由の強さの度合いについてクロス集計し、最後に相関係数を算出した。

3-1. 項目毎の集計 (1次集計)

表1に、2017年の各質問項目における1から5の評定値毎の人数と平均評定値を示した。今回の分析では、まず教職が第1志望であるかについての評定値を教職志望の程度の指標とした。次に教職を志望する理由に関す

る評定として、表1にあるように「憧れの先生がいた」から「尊敬されたい」までの13の質問を分析対象とした。

表1は、左端の列は、評定値を示している。評定は、5段階で行った。ただし、その理由が志望理由にまったく関係なければ、関係なしと評定するように指示してあった。図1はその評定値の分布を100%積み上げグラフにして図示したものである。

表1や図1から教職が第1志望であるという比較的強い気持ちを持つ学生の割合は約半数であるといえる。理由に関する評定値、「憧れの先生がいた」という項目の平均評定値および評定値4と5という強い関連と評定されるものの割合が高いことがわかる。同様のパターンは「教えることが好き」、「子どもを助きたい」でもわかる。逆に「親に勧められた」、「中高の先生に勧められた」、「一般就職に向いていない」、「テレビ映画の先生に憧れ」は、理由として低い関連として評価されている。

表1 2017年および2016年の各評定項目毎の評定値毎の人数の分布と平均評定値 (2017年はN=24、2016年はN=15)

評定値	教職が第1志望	憧れの先生がいた	教えることが好き	子どもを助きたい	部活指導者希望	やりがい	親に勧められた	中高の先生に勧められた	一般就職向いてない	テレビ映画の先生に憧れ	経済的安定	社会的に役立ちたい	社会的安定	尊敬されたい
関係なし	0	1	0	0	1	0	4	4	4	5	0	0	0	1
1	1	0	0	0	1	0	4	3	8	5	0	0	0	1
2	4	3	4	3	6	1	1	2	0	2	2	1	1	0
3	2	2	2	3	5	3	2	2	2	0	4	3	1	1
4	2	2	2	5	1	5	4	2	1	1	6	5	10	10
5	6	7	7	4	1	6	0	2	0	2	3	6	3	2
最頻値	3	5	4	3	2	4	0	2	1	1	4	3	4	0
平均	3.5	4.0	3.9	3.5	2.6	3.8	1.4	1.6	1.4	1.4	2.2	2.4	2.4	2.4
最頻値(2016)	3	5	5	4	4	4	2	0	2	0	3	3	3	4
平均(2016)	3.5	4.0	3.9	3.5	2.6	3.8	1.4	1.6	1.4	1.4	2.2	2.4	2.9	2.5

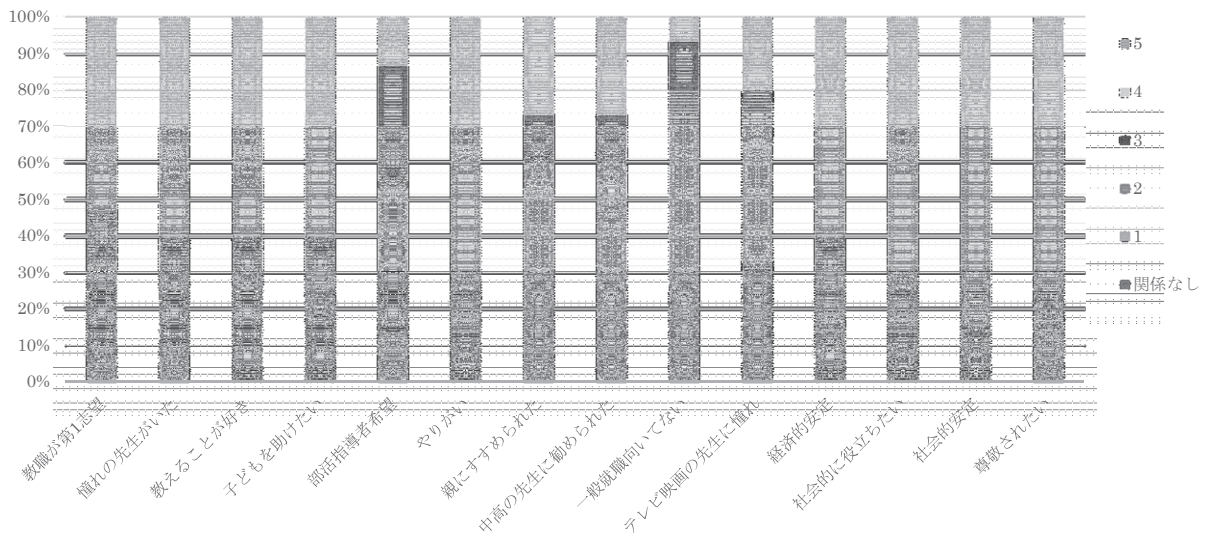


図1 2017年の各評定項目毎の人数の分布を示した100%積み上げ縦棒グラフ (N=24)

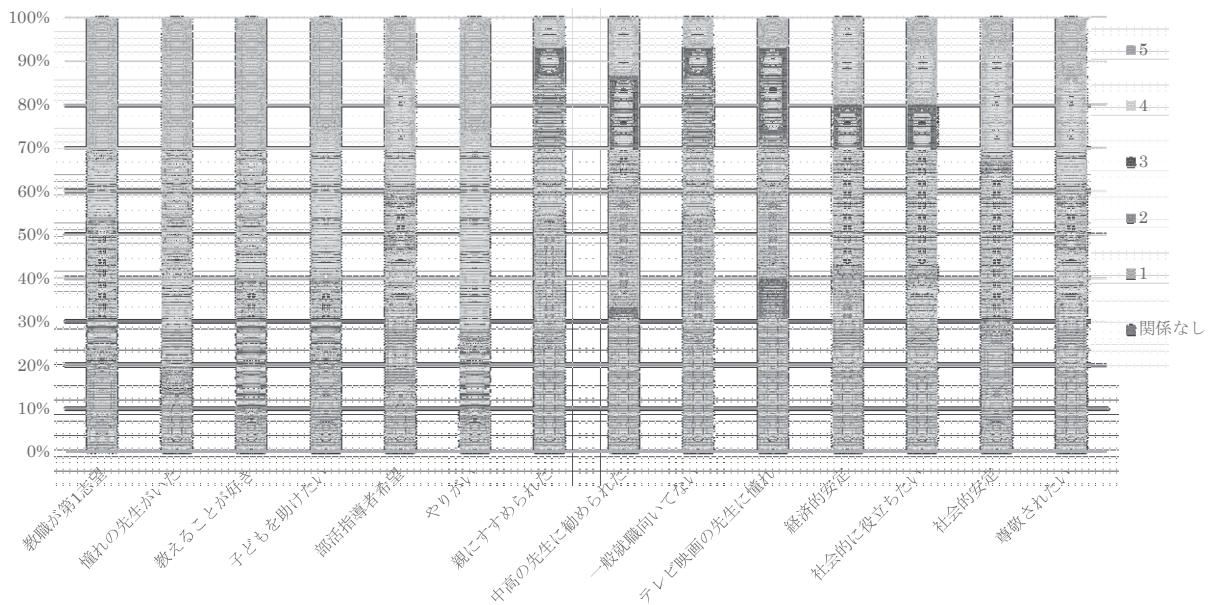


図2 2016年の各評定項目毎の人数の分布を示した100%積み上げ縦棒グラフ (N=15)

図1の2017年のグラフの分布具合と図2の2016年のグラフの分布具合を比較した場合、(1)「憧れの先生がいた」の5や4の評定が明らかに減る、(2)「部活指導指導者希望」の5や4の評定が明らかに減る、(3)「親にすすめられた」、「中高の先生に勧められた」の5の評定が0もしくは5と4が減るという現象のパターンが見て取れる。さらに(6)「経

済的安定」、「社会的に役立ちたい」、「社会的安定」、「尊敬されたい」という、社会的側面とでもまとめることのできる要因群の5もしくは4の評定が明らかに増えている。

3-2. 項目間の関係(クロス集計および相関係数)

2016年と同様に、表2および表3に「教師

表2 20171年の教師が第1志望であることとその理由に関する平均評定値

	教師が第1志望である。				
	1 (弱) (N=1)	2 (N=5)	3 (N=5)	4 (N=5)	5 (強) (N=8)
憧れの先生がいた	3.0	2.0	2.6	4.6	4.7
教えることが好き	3.0	2.8	3.0	4.4	4.2
子どもを助きたい	4.0	2.2	3.0	4.0	3.8
部活指導者希望	4.0	1.0	3.4	2.8	3.0
やりがい	4.0	3.0	3.8	4.4	4.5
親に勧められた	0.0	2.0	2.0	2.4	1.1
中高の先生に勧められた	0.0	1.2	1.8	2.8	1.8
一般就職向いていない	0.0	0.6	2.0	2.2	1.5
テレビ映画の先生に憧れて	4.0	0.4	1.6	2.0	0.8
経済的安定	3.0	3.2	3.2	3.0	4.2
社会的に役立ちたい	4.0	3.0	2.6	4.2	3.8
社会的安定	4.0	3.6	2.8	3.2	3.6
尊敬されたい	4.0	1.6	2.2	3.0	3.6

注：教師が第1志望であるという質問において、1は当てはまりの程度が弱く、5は強い。

理由に関する評定は、5件法であった。ただし、「関係なし」という評定があり、それに印を付けたものは評定値0とした。

が第1志望である」という評定値とその理由に関する評定値の関係を載せた。表3の相関係数の表より、高めの相関係数を示している項目として「憧れの先生がいた」、「教えることが好き」、「やりがい」が「教職が第1志望」という評定に正の相関関係があることが分かる。また負の相関関係が有意に示す項目は認められなかった。

2016年との比較でいうと、まず第1に「憧れの先生がいた」の相関係数が高くなっている。1次集計の結果の図1のグラフにおいて、5や4の割合が減ったにも関わらず、相関係

数は高くなった。これは、2016年は第1志望の高低によらず憧れの先生がいたが、2017年は第1志望の程度が高いと憧れの先生がいた評定値も高くなる傾向のあることを示しているであろう。また2017年と2016年ともに「教えることが好きだ」と教職が第1志望であるという傾向は同じであった。「やりがい」も同じ傾向といえる。興味深いことに、「親に勧められた」、「中高の先生に勧められた」、「社会的安定」の項目に関する相関係数は低く、有意性も認められなかった。相関係数は必ずしも高くないが、「経済的安定」、「社会

表3 2017年および2016年の教師が第1志望であることとその理由に関する評定値の相関係数

	教師が第1志望(2017)		教師が第1志望(2016)	
	スピアマンの 順位相関係数	有意性	スピアマンの 順位相関係数	有意性
憧れの先生がいた	<u>0.773</u>	*	0.343	ns
教えることが好き	0.606	*	0.667	*
子どもを助きたい	0.461	*	0.625	*
部活指導者希望	0.301	ns	-0.261	ns
やりがい	0.570	*	0.493	*
親に勧められた	<u>-0.131</u>	ns	-0.667	*
中高の先生に勧められた	<u>0.162</u>	ns	-0.591	*
一般就職向いていない	<u>0.171</u>	ns	-0.667	*
テレビ映画の先生に憧れて	-0.124	ns	-0.522	*
経済的安定	<u>0.433</u>	*	-0.064	ns
社会的に役立ちたい	<u>0.437</u>	*	0.015	ns
社会的安定	<u>0.137</u>	ns	0.5	*
尊敬されたい	<u>0.373</u>	±	-0.435	ns

注1：有意性の+は優位傾向ありを示している。

注2：2017年に明らかに2016年とは傾向の違う項目のスピアマンの順位相関係数の数値および有意性の結果の下に下線を引いた。

的に役立ちたい」、「尊敬されたい」の相関係数が昨年より上がった。

と同じであった。

4. 考察

4-1. 結果の概要

まず第1に、「教職を第1志望とする」という評定値と「親に勧められた」という評定値の相関は無相関であり、2016年の負の相関の方向とは異なった。第2に教育活動自体に関わると考えられる「教えることが好き」という評定値の相関は正の方向であり、2016年

4-2. 主たる結果に関する考察

今年も先に挙げた研究仮説にはほぼ一致した結果であったといえる。まず本研究に関する研究仮説である「親に勧められた」という学生は少ないというものは、確かに少なかった。相関係数の結果から教職を第1志望とする学生は、親に勧められたからといって教職を選んでいるわけではないようである。ただし、昨年は負の相関があったけれども今年ほぼ

無相関であったこと点は何らかの変化の要因または傾向があるかもしれない。また「教えることが好き」という教育自体に関する活動に強く理由を感じている場合、教職が第1志望であるという気持ちも強いため、本研究の第2の仮説（教職を志望する気持ちが強い学生は、教育自体に関する活動に志望する理由を感じている仮説）も今年も概ね支持されたと考えられる。

2017年と2016年を比較した時、「教職が第1志望である」という評定値と「憧れの先生がいた」が高い相関係数、「社会的に役立ちたい」、「経済的安定」が中程度の相関係数かつ2016年とは異なる傾向（表3参照）である点が特徴的であろう。憧れの先生がいたということに関する相関係数が上昇したことには、現段階での分析からは、これといった原因がはっきりしない。しかし0.7という相関係数はかなり高いものであり、2016年は0.3であったことを考えると、急上昇であろう。今後のデータ収集により、これが一時的なものなのか、何らかの世相の変化を反映したものかは明らかになるだろう。次に「社会的に役立ちたい」、「経済的安定」の評定は、表1、図1、図2を見ると平均、最頻値、その分布にそれほどの変化はあるように思わないが相関係数は2016年に比べると上昇している。今回の調査だけでその原因をはっきりさせることはできないけれども、学生の社会や政治、歴史状況に対する不安感を反映している可能性はないだろうか。例えば2017年の日本において、近隣諸国との間に戦争が起こるのではないかという危惧は多くの人を感じる不安の一つで

あったりする。不安が高いが為に経済的な安定を求める可能性はある。ただしそうだとすると、「社会的に役立ちたい」が教職第1志望と中程度の相関を示したことはうまく説明できない。

4-3. 補足的な結果に関する考察

岡田・梅村（2016）にて指摘したように、部活の指導者になりたいから教職免許状を取得したいという学生は少ないといえるだろう。授業における感想、レポート等からも急速に部活指導者志望の学生が減少している印象を受ける。外部指導者の活用、教師の多忙化の原因との指摘、スポーツ産業における指導者やトレーナーという雇用形態の増加（就労機会の増加）等が部活指導者志望の学生の進路選択から教員以外を選ぶ行動を取らせている可能性が考えられる。授業等で部活の思い出を書かせると、厳しい活動により成長をした部分もあるが、適切さを欠いた部活動のため、「中学生ながら意味が分からなかった」とか「ヒステリックでイヤだった」というような感想を書く学生が散見される。学生もどこかおかしい、指導役の教員もどこかおかしいと感じながら活動を修正することが難しいのであろう。

また本調査とは異なるが、2017年の教職に関わるガイダンスや相談において「教職はブラックだから」とか「労働時間が長い、休日がない」という学生の感想や不安の声が多いことが印象的であった。このような学生の反応やマスメディアの報道は、教職課程に属する学生そして教職を選択することを考えなが

らそれを止めた学生達の意識や行動に大きな影響を与えているのは間違いない。

4-4. 本研究の限界

本研究には、限界は岡田・梅村（2016）とほぼ同じようなものである。まず第1に被調査者数が24名であり、調査の対象となる愛知大学の教職課程登録学生のうち約800名のうちの24名であり、調査結果の一般化には相当の限界がある。ただし、岡田・梅村（2016）と同様に調査を行った教職入門の受講生は1、2年生であり、教職課程登録学生の1、2年生、特に愛知大学名古屋校舎の学生の実状にはかなりの程度、一致している印象を今年も感じる。豊橋校舎と名古屋校舎では学生の気質や考えに相当の違いを感じるため、今回の調査結果も、名古屋校舎の学生の結果と捉えるべきである。また2017年と2016年の2年間の調査結果の比較であり、変化があっても単なる隔年現象であり、結局は平均へ回帰していく可能性は高い。この限界を見極めるためには、今後も継続的に同様の調査を行っていくべきであろう。

4-5. 今後の検討

まず第1に、この調査を継続的に行っていくことが挙げられる。調査の評価として、画期的な調査やその結果と言い得るものではないだろうけれども、愛知大学名古屋校舎の教職課程生に関する調査として、継続的、特に5年10年と続けていくことが新しい知見を明らかにするのは確実である。第2に岡田・梅村（2016）にも指摘したように、さらに大人数、様々な集団の調査を行うことが結果の一般化を高める、第3に教職を第1志望とする以外の項目との関係、因子分析的な手法による全体の構造を明らかにする分析結果の報告も求められる。

5. 引用文献

- 愛知大学教職課程の概要、2016、愛知大学教職課程研究紀要 第6号 181-187
- 岡田圭二・梅村清春、2016、愛知大学教職課程の学生における教職の志望度と志望理由の関係について（1）－志望の程度と理由の関係に注目して－、愛知大学教職課程研究紀要、第6号 147-152
- 岡田圭二 2016 教職イニシャル・レポートの活用－学生の主体的な学びを促すツールとしての可能性と課題－、愛知大学教職課程研究紀要 第6号 175-179